

## 同性愛者からカミングアウトを受けた被開示者の心理プロセス

— 友人と家族に焦点を当てて —

平井美紀

### I 問題と目的

近年、セクシュアル・マイノリティについての社会的関心が高まってきている。一方で、正しい知識が世間に浸透しているとはいえず、未だ差別や偏見が存在している現状において、セクシュアル・マイノリティの人々の抱える困難さは想像に難くない。

これまでの研究から、セクシュアル・マイノリティの人々が抱える精神的健康のリスクが高いことが分かっており、精神的健康の促進や予防の低下が求められている。日高（2012）は「ゲイ・バイセクシュアル男性の65%は人生で一度は自殺を考えたことがあり、14%は自殺未遂の経験があったこと、自殺未遂のリスクは異性愛男性と比較して約6倍高いことが明らかになっている」と述べている。さらに、日高（2000）による研究では、ゲイ・バイセクシュアル男性の多くは異性愛者を装う役割演技によってストレスを抱えており、そのような異性愛者的役割葛藤の得点が高いものほど、一般集団と比べて抑鬱傾向、特性不安、孤独感、自己抑制型行動特性が優位に高く、自尊心が優位に低いことが明らかになっている。このような精神的健康に深くかかわる要因の一つとして他者からどのように受容してもらえるかが挙げられる。石丸（2014）によるLGBの自尊感情と他者からの受容感との関連についての研究では、セクシュアリティに焦点化した受容は、自尊感情に対して際立った効果は見られなかったが、他者からの受容感が自尊感情に及ぼす正の影響は異性愛者の約2倍であることが明らかになっており、LGBは異性愛者よりも、社会的な受容や排除によって敏感に自尊感情を変化させやすい可能性が高いと考えられる。

このような他者からの受容は、セクシュアル・マイノリティの人々がカミングアウトを行う場面においてもみられると考えられる。しかし、日高（2012）の日本人の同性愛・両性愛の男性を対象

とした調査では、親にカミングアウトをした人は約10%、友達だと44%前後である。また、釜野ら（2016）の研究では、約4割の人々が、同性または両性に恋愛感情を抱くことに抵抗感を示しており、関係性が近いほど嫌悪感を示す人が多いことが分かっている。

そこで、本研究では、セクシュアル・マイノリティの中でも性的指向の少数者である同性愛者に視点を当て、同性愛者の身近な存在である家族や友人は、カミングアウトを受けた後どのような心理プロセスを辿るのかについて明らかにすることを目的とする。

### II 方法

**研究協力者：**①友人にカミングアウトをした同性愛者の方（A1）、A1からカミングアウトを受けた友人（A2）②家族にカミングアウトをした同性愛者の方（B1）、B1からカミングアウトを受けた家族（B2）の4名。

**調査期間：**2018年8月～10月

**調査場所：**研究協力者と相談した上で、プライバシー保護が可能で研究協力者が安心して話すことのできる場所でインタビューを行った。

**インタビューガイド：**開示者に対して、①カミングアウトをしようと思ったきっかけ②当初、カミングアウトをしたことについてどのように感じたか③現在、カミングアウトをしたことについてどのように感じているか④当初から現在に至るまで、気持ちの変化があったか。被開示者に対して、①カミングアウトを受けた際の気持ち②カミングアウトを受ける以前、当事者の性的指向についてどのように考えていたか③現在の当事者の性的指向に対する気持ち④カミングアウトを受けた当時から現在の気持ちについて変化があったかどうか。

**分析方法：**被開示者がカミングアウトを受けてから現在に至るまでの過程は、様々な感情が時間に伴って変化すると考える。そのため、本研究では時間の経過に伴う変化を捉えやすい複線径路

アプローチ (TEA) を用いて分析を行う。

### Ⅲ 結果・考察

友人からの被開示者は、〈戸惑い・動揺・抵抗がなくなる〉〈セクシュアル・マイノリティの人々を隔てるものはいらないと再認識する〉、家族からの被開示者は〈その場で素直に受け止めた〉〈「違う世界」を理解する〉という等至点に至ることが明らかになった。

本研究の結果から、家族からの被開示者の心理プロセスと、友人からの被開示者の心理プロセスに大きな違いは見られなかった。しかし、どちらもカミングアウトを受ける以前の関係性を超えて受容するにあたって、同性愛者嫌悪の低さが見られた。この同性愛者嫌悪の低さは、開示者がカミングアウトを行う相手を選別する際に重要な指標であると言える。

また、カミングアウトを受けた家族と友人の共通点として、開示者の性的指向を受け止めた後、カミングアウトを受けたことがきっかけとなりセクシュアル・マイノリティ・グループ全体への理解が深まっている点が挙げられる。三部 (2009) によって、カミングアウトを受けた後の「対処」

について「悲嘆の過程」では説明できないと指摘されていたが、本研究でも友人・家族において「悲嘆の過程」と類似した過程は見られなかった。本研究で明らかとなった被開示者の心理プロセスは、同性愛者が性的指向をカミングアウトする際の不安や戸惑いを軽減することに繋がると考える。

### 引用文献

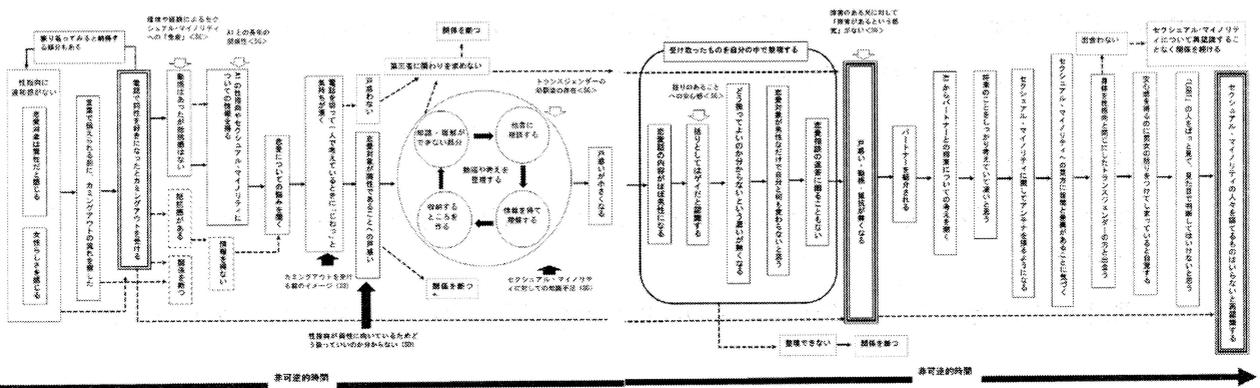
日高庸晴 (2000). ゲイ・バイセクシュアル男性の異性愛者的役割葛藤と精神的健康に関する研究. 思春期学, 18 (3), 264-271.

日高庸晴・星野慎二 (2012). みんなと同じ恋愛ができない—セクシュアルマイノリティと思春期. 松本俊彦 (編). 中高生のためのメンタル系サイバールガイド. 日本評論社. こころの科学, 49-54.

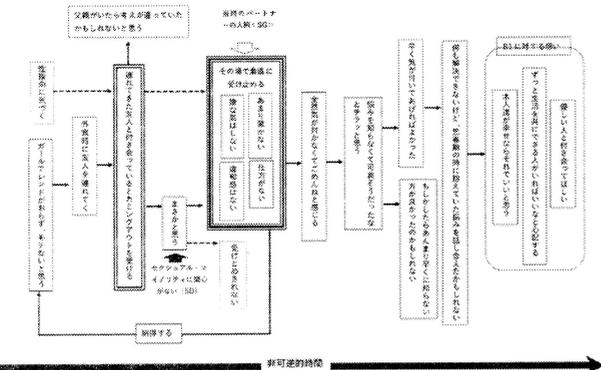
石丸径一郎 (2014). セクシュアル・マイノリティの自尊感情とメンタルヘルス. 針間克己・平田俊明 (編). セクシュアル・マイノリティへの心理的支援—同性愛, 性同一性障害を理解する—. 岩崎学術出版社, 50-59.

釜野さおり・石田仁・風間孝・吉仲崇・河口和也 (2016). 性的マイノリティについての意識—2015年全国調査報告書. 科学研究費助成事業「日本におけるクィア・スタデーズの構築」研究グループ (編). 独立行政法人日本学術振興会.

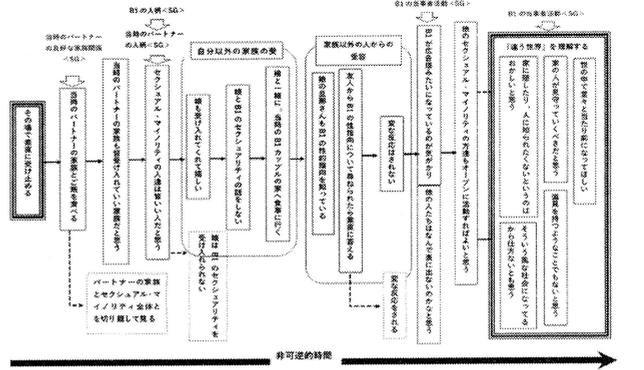
三部倫子 (2009). 「悲嘆の過程」の批判的検討 「ゲイの息子」を持つ親の語りと「縁者によるスティグマ」概念をもとに. 論叢クィア, 2, 71-93.



【図1】友人からカミングアウトを受けた被開示者の心理プロセス



【図2】家族からカミングアウトを受けた被開示者の開示者に対する心理プロセス



【図3】家族から開示された被開示者の他者との関係性の中で発生する心理プロセス